

ぼくのえんぴつ

星^{はし} 未来^{みく}翔^と

小学校に入學してから今まで五年間、ぼくのえんぴつを母がけずってくれている。

えんぴつけずりを持っていないわけではない。一年生の初めのころ、えんぴつけずりでけずったこともあった。けれど、筆圧が強いぼくはすぐにえんぴつが折れてしまっていた。担任の先生に

「2BではなくBにしてみたらどうか。」

と言われたこともあったが、Bに変えてもやっぱり折れた。

そこで母が

「カッターナイフでけずってみたらどうか。」と言ってカッターナイフでけずってくれた。

次の日から、ぼくのえんぴつは折れなくなった。

あるとき、母に

「えんぴつけずって」

とたのむのを忘れ学校に行ったことがあった。授業の準備をしているとき、そのことを思いだし、どうしようかと思いな

がら筆箱をあけるとえんぴつがすべてけずってあった。母がぼくがねた後にけずってくれていたのだ。

それから何回かけずってとたのむを忘れてもいつも次の日になるとけずってあった。

こんなこともあった。図工の時間、となりの席の友達に「これどうやってけずっているの？」

と、ぼくのえんぴつを不思議そうにながめながら聞かれたことがある。カッターナイフでえんぴつをけずっていることがめずらしかったのだろう。ぼくがカッターナイフで母がけずっていることを教えると友達にうらやましがられた。そのときぼくはうれいような気持ちになった。

ぼくは、母にえんぴつをけずってもらっているおかげで安心して気持ちよく授業が受けられる。このことをいつも感謝しているが、母にありがとうと伝えたことは一度もない。だけど授業が始まる前、えんぴつを出しているとき、いつも思っている。

「お母さん、ありがとう。」